



**自分がアレンジした花で
ほっとした気持ちになってもらえたら
それだけで嬉しい**

真藤 啓子（まとう けいこ） 有光 清治（ありみつ せいじ）

庭にも部屋の中にも置かれんばかりの花たち。かぐわしい香りと心落ちる音楽が静かに流れる。

フラワーデザイナーの堤田園江さんが、自宅でお花を教えながら提供する「癒しの場」には欠かせない大切なアイテムだ。

8年前に百貨店の自宅でスタートさせた「仲間」に癒される四季の花アレンジ教室は、子育てや、時間に行われる日曜に、ちょうどいいお花を届けた王様たちが、年に5回のアレンジを楽しく過ごす。

「癒しがあった」「またお花をもらえた」「アレンジを学んだ生徒さんたち、清々しい様子が嬉しい」。

「必要なのは出合いの場。もちろんお花からもちろんギョーも大きいけれど、仲間と過ごす時間こそが、一番の活力源なんです」と話す堤田さん。だからこそレッスンの日だけでも日常から離れてほしい、



真藤 啓子（まとう けいこ） 有光 清治（ありみつ せいじ）

教室を開くにあたり自宅を改装するところからはじめた。

ガラス張りのサンルームとそこから眺める庭を舞台に見立て、季節ごとにシーンを変える工夫を施したのだ。

花が癒しほっと人を癒してくれるか、そのこと

堤田園江さん

フラワーデザイナー 真藤 啓子 担任

それは、おれもしないマヤことという名のバラ。母親が、一番好きな花のバラを、お花屋さんと相談して購入した。お花屋さんと相談して、選んでくれたものだった。

そのバラの花束が卒業生贈り物として、

た堤田さんをお花のプロへと導いた。

同じ頃、偶然目にしたフラワーアーティストの大御所、松田啓一さんが出版した「花と心」に魅せられ、早速、彼の門下生となる。

プロになるための強い決意に満ち

ての人間だった。しかし松田先生の優しく繊細な作風とは異なり、アレンジはそれは華しいものだった。張り詰めた空気、気難しい先生の顔を伺いながらのアレンジは、一秒たりとも気を抜けない、毎回

が緊張の連続だった。レッスン前日になると背がキリキリと縮むこともあった。それでも習ったばかりのアレンジメントを家に持ち帰り、はんなり眺めて、いつか何時間か前のあの緊張感が甦ったかのように心なをむ自分こそここにいた。

真藤 啓子（まとう けいこ） 有光 清治（ありみつ せいじ）

つづみだにその元

真藤 啓子（まとう けいこ） 有光 清治（ありみつ せいじ）

2年前には、長女の結婚式を取り仕切り、ホテルの会場を花で埋め尽くした。

式の前日には、招待客の数の1.5倍のブーケを作り、アトナにした。帰りにはひょうひょう持ち帰ってもらったブーケも喜んでくれた。

分がそこには、

堤田さんが考える基本コンセプトは、癒しと仲間との出合いを多くすること。

昨年クリスマスには、自宅で歌とおしゃべりやゲームをミックスしたイベントを開催した。3本のキャンドルと300個ものイルミネーション、それに真っ白なクリスマスツリー、ライトアップされたトナカイとサンタクロースのオーナメントが生徒さんや友人たちを迎えた。オケウエーの横井香合さんが唄う「さつ」といあわせに届いた人も。

さらに自然の中で森林浴をしながらレッスンをしたら、昨年11月には富士の裾野に広がる千里木高原に「園江キョウリ」、仲間と集う場所を開設した。



卓上に置いても可憐なブーケのリース、ガラスに浮かべたブーケやリースといろいろのアイデアが満載。さらにそれぞれの美しさを引き出した「花に飾りつけ」や、全部が主役。すべての花をどうアレンジすれば美しく見せてあげられるかを考えることが大切。



癒しを伝えるには、時にはイラストやカード、写真を出して、時には実際に花やアレンジの作り方を一緒に見せてみる。花とアレンジの両方を大切に、すべてに心をこめて取り組む。これからの作品も最高のフラワーアレンジが目標。

